

三 東山キャンパス — 理学部・工学部

◆ 理系地区

地下鉄本山駅の交差点から東南へ、四谷通に沿って緩い坂を登り、東山キャンパスに入ると、最初には右手（西側）眼前に現れる建物は、学生会館と北部厚生会館（北部生協）です。その周辺には工学部関係の建物（1・2・3・7号館・新1号館など）が林立しています。そしてここから四谷通を挟んで反対側（東側）にも工学部関係の建物（4・5・8・9号館・先端技術共同研究センターなど）が建っています。さらにその南と東に理学部の建物（A～G館など）があります（以下、巻末現況図を適宜参照）。現在「理系地区」と呼ばれているところですが、東山キャンパスの歴史もこのあたりからはじまります。

◆ 東山キャンパスの決定

名古屋帝国大学の創設に伴い、新キャンパスの建設については、現在の東山地区のほかにくつかの候補地がありました。当時の愛知県知事は矢田川廃川敷地（現名古屋市北區光音寺町・

川中町周辺)を考えていましたし、ほかに鳴海町(現名古屋市緑区)・天白村(同天白区)・猪高村(同名東区)・日進村(現日進市)などが名乗りをあげていました。当初は、県有地約四〇万六五〇〇平方メートルがある矢田川廃川敷地が有力ともいわれていましたが、一方で鳴海町からは後からの追加分を含め三三万平方メートルを無償寄付したいという申請もあり、候補地の決定は流動的な状況でした。

最終的には、文部省・大蔵省当局が実地調査を行い、東山公園隣接丘陵地約六〇万平方メートルが選定されました。当初有力視されていた矢田川廃川敷地の県有地は必要面積が不足しており、かつ地形が横長で凸凹が多く、キャンパスとしては不相当とされました。決定後も用地交渉で紆余曲折がありました。一九三九(昭和一四)年五月には東山地区の無償提供が決定されました。しかし結局この時点では、約四七万二七〇〇平方メートルの用地しか取得できませんでした。

◆理工学部の設置から理学部・工学部へ

理学部・工学部は、名古屋帝国大学が創設された一九三九(昭和一四)年に理工学部として設置されましたが、この年はまだ学生も入学しておらず、実質の開設は翌年四月になりました。開設当初は、東区西二葉町(現東区白壁二丁目、明和高校付近)にあった愛知県立第一中学校(現

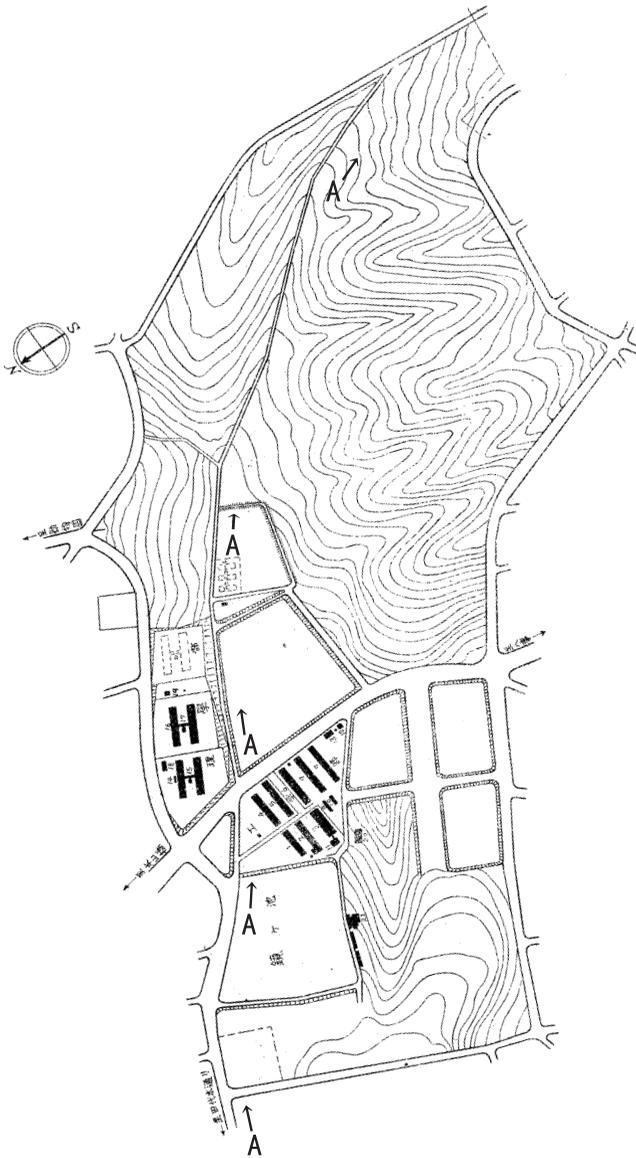
愛知県立旭丘高校の前身)が移転した跡の旧校舎を仮校舎として利用しました。ただここは、第二学年までの教育施設であったため、一九四一(昭和一六)年度末までには新しい本校舎を建設しなければなりません。それが東山キャンパスです。

理工学部は、開設二年後の一九四二(昭和一七)年四月に理学部と工学部に分かれ、まず工学部が東山キャンパスに移転してきました。工学部が東山キャンパスに移転してきた最初の学部です。理学部についても、当初は工学部と同じく四月の移転予定でしたが、工事が遅れたため、六月の移転となりました。

◆工学部校舎

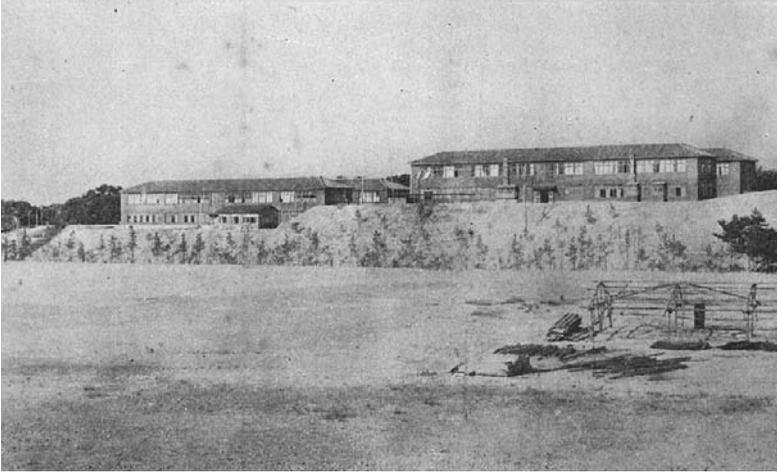
理学部・工学部の校舎は、当初から現在の理系地区とほぼ同じ場所に建てられていましたが、建物配置は現在と大きく異なっています【図10】。

工学部校舎は、最初木造二階建(一部平屋建)で三棟(四・五・六号棟)が、続いて木造平屋建(一部二階建)で五棟(一・二・三・七・八号棟)が、四谷通と鏡池に挟まれた地区に建てられました。今の北部厚生会館・工学部7号館が建っているあたりです。当初は鉄筋建築を考えていましたが、戦時中で物資不足のため、やむをえず木造校舎となったようです。また現在の建物はやや南西方向を向いていますが、当初の工学部校舎はほぼ南面向き東西方向、すな



【図 10】1942 年東山キャンパス図

中央が四谷通、その上（東）が理学部、下（西）が工学部校舎。矢印Aは耕地区画整理時の旧道。



1942年東山キャンパス

ほとんど生えていないことがわかります。

わち四谷通に対して垂直方向に建てられていました。

◆理学部校舎

そして四谷通を挟んで反対側、現在の工学部8・9号館や先端技術共同研究センターがある区域に、理学部校舎が四棟建てられました。工学部と同様木造でしたが完全な二階建てでした。新しく耕地区画整理された場所であり、樹木もない高台となりました【図11】。また翌一九四三（昭和一八）年七月には平家建二棟が増設されました。現在では、深い緑に覆われていることもあって、現工学部の建物は見えにくくなっています。工学部をよく知らない文系の方のなかには、ここに建物が建っているとは思っていない方もいるでしょう。



【図11】現在の理学部A館付近からみた
左（西）が工学部、右（東）が理学部校舎。当時は樹木が

またこの地区の樹木も、一見すると昔からあつた森林と思いがちですが、そうではありません。いま述べたように、ここは樹木もほとんど生えていませんでした。いま林立している樹木はこの約六〇年間で育つた樹木です。

◆「緑のトンネル」

驚かれるかもしれませんが、この地区の南側に一本のトンネルがあります。四谷通三丁目交差点から学内に入り、四谷通沿いに少し行つた東側にそのトンネルの入口はあり、そこから理系食堂を通つてグリーンサロン東山から農学部へと抜けています。つまりじつは、深い緑に覆われた「緑のトンネル」と呼ぶことができる道のことです（表紙写真）。ただし南側は樹木が少なく、特に理系食堂の反対側、理学部G号館

前は、間伐された状態です。さらによく観察すると、その手前の四谷通入口近くにおいても、同じく南側は北側に比べ樹木が少ない。これは、この南側、現在の工学部4・5号館が建てられている場所に、昔は運動場（東山運動場）があつたため、樹木を深くは植えなかつたためと思われれます。それでも「トンネル」のように緑が深く見えてしまうのは、そのすぐ南側に工学部5号館が近接して建っているため、南からの日光が終日遮断されているためでしょう。

この道は、じつはもともと東山キャンパスができる以前の、耕地区画整理の時にできた道で、本来は鏡池の北の道路から学生会館前の南を通り、この道へつながっていました【図10】A（二七頁）。ちなみに、現在の鏡池北の道路は、西から来る場合、鏡池を過ぎると急に左手（北）へ曲がり、四谷通三丁目交差点を経て東山公園方面へ向かっていますが、この道路は東山キャンパスが建設された際に新しく出来た車道です。そのためこの道の南側＝理学部校舎北面も当初は現在のように樹木に深くは覆われてはいませんでした。

◆ 「緑の学園」構想

東山キャンパスの建設当初は、農学部周辺より奥になる東南部区域を除き、前述したように耕地区画整理地そのまま、緑は少なかつたようです。初代渋沢総長は「緑の学園」を構想し、植樹に力を入れて、風致を高めるようにしました。『名古屋帝国大学敷地内植樹調査報告』を

策定させ、それに基づいてこの理学部・工学部周辺に樹木を植え、さらに校舎が完成することに植樹をしていきました。そのため、初期にできたこの地区の方が緑が多く、前述したように自然の樹木と見間違える景観です。

現在でもこの方針は続いているようです。たとえば「緑のトンネル」の最奥部分、農学部に近いところに、最近「グリーン・サロン東山」が建てられました。その建設の際、「緑のトンネル」の一部が伐採されてしまいました。そして新たに幼木が建物周辺に植えられています。これをどう考えるかは専門家の方の判断に委ねるほうがよいのですが、六〇年前と同じく、緑を伐採して建物をたて、改めて新たに緑を植え直すという方法が依然続いていることがわかります。

◆空襲と疎開

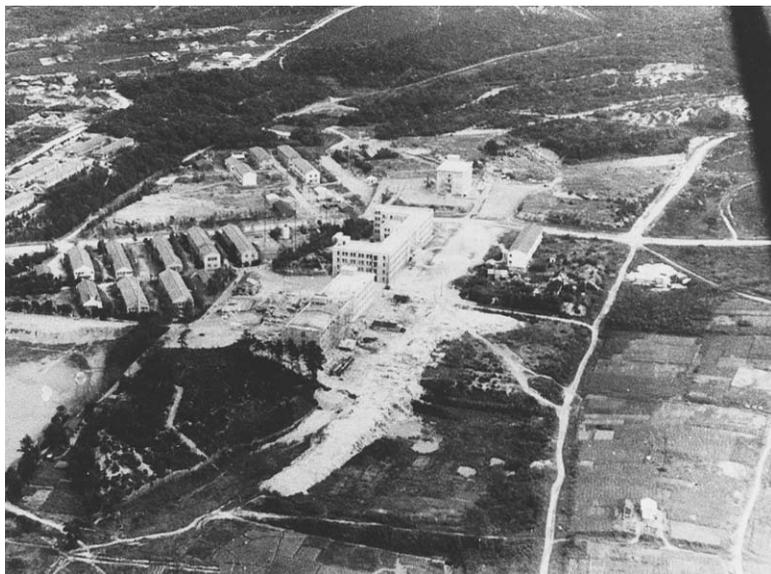
このようにして東山キャンパスは発足しましたが、その三年後には医学部同様、空襲にあい。ます。一九四五（昭和二〇）年四月一九日と二七日に、付近にあった高射砲陣地を目標として投下された爆弾の一部がキャンパス内にも落下し、校舎への直撃は免れたものの、振動や爆風のために、窓ガラスが割れたり、屋根瓦が落ちたり、天井が抜け落ちるなどの被害が出たとい。います。また五月一四日にも再び空襲をうけ、大学本部や航空医学研究所とともに理学部生物

学教室が焼失しました。ただし、前述した鶴舞キャンパスに比べれば、被害はわずかでした。

また幸いなことに、三月に鶴舞キャンパスが空襲にあつていたため、それまで具体化していなかった疎開が緊急に決まり、この五月の空襲より前に、東山キャンパス理・工学部の疎開はすでにおおむね終了していました。別に、書物や重い機器は地下に埋蔵もされたようです。疎開先は愛知県内はもとより、奈良・三重・岐阜・静岡・長野・石川・富山・新潟と中部地方全体に及んでいます。こうして東山キャンパスは、発足後わずか三年で離散してしまいました。

◆敗戦とキャンパス再建（高蔵キャンパス）

敗戦後、ただちに復興計画が策定されました。当時工学部は、東区西二葉町のキャンパスのうち七五・三%を焼失していました（おそらく敗戦後はこのキャンパスはほとんど使用されなくなつたと思われます）。かわりに昭和区広池町にあつた名古屋市立名古屋商業学校（現向陽高校敷地）の校舎を補修して一部使用していましたが、この復興計画によれば、元歩兵第六連隊・高蔵工廠・熱田工廠の建物の転用をうけるはずとなっていました。しかしこれらの建物は実際にはGHQ／SCAP（連合国軍最高司令官総司令部）の利用に供されたため、結果としてはわずかに熱田区六ツ野町（現熱田区六野一）にあつた高蔵工廠の転用をうけたのみでした（高蔵キャンパス）。



【図 12】 1954 年東山キャンパス（中日新聞社提供）

鉄筋建築は工学部 1 号館南側建物と理学部 A 館の一部のみ。キャンパスは現在のグリーンベルトまでで、右（南）の文系地区はまだキャンパスに入っていません。

一方理学部については、疎開地からの引き揚げは困難をきわめたにもかかわらず徐々に東山に集結し、敗戦の年の一月には授業を再開しています。焼失した生物学教室は、当初は環境医学研究所（元航空医学研究所）の建物の一棟を間借りしていましたが、一九四九（昭和二四）年一月には焼失跡地に再建されました。続いて一九五二（昭和二七）年三月には、地球科学研究室も新築されました。

◆工学部の東山キャンパス復帰

— 画期的な建築交換移転

工学部の建物は、初の鉄筋建築で

ある1号館が一九五一（昭和二六）年に、続いて五四年には2号館の一部が完成しました。しかしこの当時1号館も南側建物だけで、北側建物は建てられていませんでした（一九六二（昭和三七）年完成）【図12】（前頁）。一方で、敗戦後の復興がすすむにつれて、東山キャンパスへの集結が全学的な大きな課題となっていました。理学部は東区西二葉町キャンパスを焼失していたため、結果的にほぼ集結を終えていましたが、工学部は先の高蔵キャンパスが移転対象でした。

名古屋大学は文部省への予算交渉の努力の結果、他大学に比べ予算配分が相当考慮され、土地購入・建物建設は順調に進んでいました。しかし、それでも当時の整備計画どおりには進展していませんでした。文部省からの財源のみでは、おのずと限界があつたのです。

そこで考えられたのが建築交換移転という方法でした。これは高蔵キャンパスを希望する民間会社に、工学部の建物を東山キャンパスに建ててもらい、これを名古屋大学が譲り受ける代わりに、高蔵キャンパスを譲渡交換するものでした。これには法的解釈から、大蔵省と種々の交渉を必要としましたが、当時の事務局長であった須川義弘さんほかの努力により、実現に何とかこぎつけることができました。この建築交換移転によって工学部2号館の未建設部分が一九五六（昭和三一）年に完成し、工学部は東山に集結できたのです。なお、この名古屋大学が考え出した建築交換移転は、以後他の国立大学や諸官庁でも行われるようになりました。名古屋大学事務局の、歴史に残る成果です。

◆木造校舎から鉄筋建築へ

理学部でも、一九五三（昭和二八）年に鉄筋建築の本館（現在のA館）が新築され、その後も徐々に増築され、一九六四（昭和三九）年三月に現在の形となりました。さらに【図13】（次頁）のように次々と新しい鉄筋建築が増築されていきました。なお、東山運動場にあった生物学教室などの木造校舎は、C・D館が建てられていく中で取り壊されていきました。また北側にあった木造校舎六棟も、工学部百万ボルト超高压電子顕微鏡研究室や超高压力高温実験室の建設のため、一九七三（昭和四八）年八月の第二物理学教室の取り壊しにより姿を消しました。

一方工学部では一九六〇（昭和三五）年六月の整備委員会で、建物の配置上または大学の美観上、鉄筋建築の1・2・3号館を並列に建設することが正式に決定され、鏡池南側が3号館建設予定地として確保され、一九六六（昭和四一）年に完成をみました。さらに一九六一（昭和三六）年三月には総合運動場（陸上競技場・野球場）が通称「山の上」にできたことにより、それまでの東山運動場跡地には4・5号館が建てられました。そのほかの工学部主要建物は、【図13】（次頁）のようになります。なお、工学部の木造校舎も、一九七〇（昭和四五）年に、現在の機械学科実験室を建てる際に、六・七・八号棟が取り壊されたのを皮切りに、最終的には、一九七六（昭和五一）年に現在の北部厚生会館を建設するため、五号棟（旧航空工学科実験室）が取り壊されたのを最後としてなくなりました。

	新	築	最	終	増	築
工 学 部						
1号館	1951. 3				1970. 2	
2号館	1954. 3				1956. 5	
3号館	1962. 3				1970. 2	
4号館	1964. 3				1970. 3	
4号館管理棟	1967.12					
5号館	1967.12				1987.11	
6号館	1963. 2				1967.12	
7号館A館	1971. 2					
7号館B館	1971. 2				1980.12	
8号館	1975. 6				1979. 2	
8号館北館	1987.11					
9号館	1980. 9				1983. 3	
理 学 部						
A館	1953. 3				1964. 3	
A-2号館	1979. 3					
B館	1965. 3				1966. 3	
C館	1967.12				1968.11	
D館	1968.11					
E館	1967.12				1979. 3	
F館	1980. 3				1985. 7	
G館	1989.11					

【図 13】 工学部・理学部の主要建物沿革 ※僅かな増築は除いています。

ところで、一九九五（平成七）年には、鏡池東側にあつた工学部実験室建物を解体して、新たに工学研究科1号館（工学部新1号館）が建てられました。そして現在、1号館北側建物跡地に新しく総合研究棟が建てられようとしています。今は、古くなった鉄筋建築を取り壊して、新たな鉄筋建築を建てる時代となつたのです。

四 名城・瑞穂・豊川キャンパスから東山へ 一文学部・教育学部・情報化学部

◆文系地区

理系地区はグリーンベルト北側に位置していますが、反対の南側は、一番西に情報化学部があり、東へ文学部・教育学部・法学部・経済学部の各文系学部の建物が整然として建ち並んでいます。グリーンベルトをはさんで、工学部1・2・3号館とちようどシンメトリ的に配置されています。これらのうち西側にあたる建物Ⅱ文学部・教育学部・情報化学部の三学部に関係する前身旧制学校として、第八高等学校と岡崎高等師範学校がありました。